

ラウンドテーブルV報告

障害児教育における「音楽遊び」をどう指導したらよいか

齋藤一雄（上越教育大学）

養護学校や障害児学級、音楽療法の関係者等、約30名が参加した。昨年は、障害児の音楽活動には音楽遊びの要素が多く含まれ、楽しい活動を基本に、発達の観点を持ち、音を聴き、楽器に触れ、人と活動を共有するなどの要素を含む音楽遊びを展開していくことについて討議された。

今年にはさらに、遊びの教育的意義や発達にそった発展的形態、遊びと課題性との関連を考えながら、小学部の初期段階に位置づけられる「音楽遊び」について、遊びによって音楽活動を楽しむことからどのように指導したらよいかを考えることにした。

1. 提案内容

森乙和会員(大阪府立寝屋川養護学校)による「アフリカの音楽で遊ぼう」の実践が、まず紹介された。高等部3年生を対象に、聴く力、集中して表現する力を育てる、イメージを広げ創造的な表現力を養う、アンサンブルの楽しさを味わう、様々な音楽や楽器に興味をもつことをねらいとした実践である。

アフリカの音楽の実践は、カリンバという楽器との出会いから始まった。生徒は、ロイドの演奏曲を聴いて、カリンバの2・3音を自由に選択し、オスティナートの形式で演奏した。また、歌「ライオンは寝ている」「サンサ・クロマ」は、アカペラで挑戦した。教師の範唱の模倣から入ったが、大混乱を起こした。しかし、ボディパーカッションやリズム楽器を導入することで、消極的だった生徒も楽しく参加するようになった。自作のウォータードラムその他の楽器によるポリリズムの合奏も行った。

生徒が音楽をとおして、発散することより集中することを大事にしてきたが、音の違いの聴き取り、友だちの音を聴くこと、自信をもった表現、イメージと表現の幅を広げること、アンサンブルでのコミュニケーションを高めていくことが課題とされた。

2. 討議内容

質疑応答の後、イメージを広げるという点で、討議が広がっていった。生活経験との結び付けたり、絵などで具象化したりしてイメージ化を図る他に、イメージを育てるには見えないものを見る、聞こえないものを聴くことが大事との意見も出された。

また、子どもは、繊細な楽器の響きに能動的であ

り、その微妙な反応や行動を見逃さずにかかわっていくこと、また、新しい気持ちの動きや行動の背景には、それまでの積み重ねによる自信が考えられることが指摘された。

さらに、一人一人の子どもにとっての遊びや楽しさを教師がどう感じ取っていくかが大事であり、それが音楽づくりにつながっていくのではないか。そのために、一人の子どもの反応を皆で共有したり、子どもの内面を考えて子どもに返してみたり、既成の曲や楽器演奏に新たなリズムや動作を加えたりしていくことが重要ではないかと議論された。

具体的な音楽場面で、どのように子どもたちの反応を見取っていくか、つまり、指導者側からすると、具体的な子どもの行動を評価していくことが必要である。しかし、この子どもの行動の見取りや評価については、たとえば、子どもの楽しい表情から読み取るといっても、子どもによっては微弱であったり、様々であったりするのではなかなかむずかしい。活動中には反応を見せなかった子が、活動終了後に「ニヤッ」とすることによって楽しんでいたことがわかることもある。子どもの発達段階についても考えていかなければならない。さらに、指導者と子どもの音楽的なやり取りの中から見えてくるものが大事であり、その中で互いに共感できることが重要となることなどが討議された。

3. まとめ

「音楽遊び」をどう指導するかについて、子どもが音楽からもつイメージをとらえ広げていくこと、子どもの能動性や微妙な反応を見逃さずにかかわっていくこと、一人一人の子どもにとっての遊びや楽しさの見取りの大切さ、具体的な子どもの行動の評価の必要性など、「音楽遊び」を指導していく際の基本的な問題について、示唆に富む意見を交わすことができた。

テーブルを囲んで、参加者のやり取りの中で、こういうことが見えてきたというまとめはむずかかったが、互いに共感できる討議もいくつかなされたのではないかと考える。